

れてゆくものと思われる。このほか仏教女性誌『女性の光』にも多くの全集逸文があるが、紹介は別の機会に譲りたい。なお現在『良友』については第四年七〜九、一一号（大八）、第八年九、一二号（大十二）、第九年六、八、九、一一、一二号（大十三）、第一〇年二〜七号（大十四）、第一一年一、五〜九、一一、一二号（大十五）、そして終刊までの第一二年一、四〜八号（昭二）が未見である。

「深更弾琴」「有貫マダムは何がお好き?」「羽子板」「政治と文学」「稗播き」は入谷清久氏から提供していただいた資料であることを明記しておく。入谷氏にはあらためて深謝を申し述べておきたい。

平成十七年二月二十五日原稿受理

大阪産業大学 教養部非常勤講師

合つてゐるのである。大乘的な立場からしては、世に仏教に関
はりのないものは、何物もないのである。

今や仏教の持つ特殊な東洋的グーは、女史にとつて、たまら
なき甘味でさへある。そこに生活と宗教との一枚境があり、女
史自らによつて、こなし切られた仏教のすがたが存するのであ
る。

×

×

×

然るに、口さがない世の文筆家たちは——
「岡本かの子は仏教を言はなければ、とても良いのに……」
と世評する。

仏教徒たることを公言することは、少くとも文壇人にとつて
は、損であるらしい。

茲に大きい問題が横はつてゐる。

純文学者として世に処するためには、宗教を、仏教を捨てね
ばならぬのか？ 仏教イデオロギーは、全然、反芸術的なもの
なのだらうか？

断じて否であらねばならぬ。

要は時代の動向に敏、不敏にあらう。従つて真に時代に自覚
を持ち、時代性の豊富な仏教が創造されねばならぬ。その点、
ヨーロッパの文豪たちの作品に表れた宗教的修養は、何と云つ
ても麗はしく、奥深いものがある。例へば、一トルストイを想
起しても、それは充分に解ることであらう。

「本当に真面目にやりませう……」

女史は飽くまでも大乘仏教的積極道を辿らるゝ人である。

——『金言聖語辞典付録 日本宗教 布教のしをり』東

方書院、昭和九年一月二十日発行 六〇一〇頁

岡本かの子が仏教性を内在させた小説を書こうと考え、それ

を実作に表そうとしたことは作者自身の言説からも多くの例を
挙げる事ができる。このパンフレット(原文総ルビ)もその
一例である。かの子は「女流作家」と紹介され、他に「豊島師
範学校長」の成田千里「ローマ大法王に詣して」、「印度志士」
と記されたラス・ビハリ・ボース「大アジア運動と宗教信仰」、
そして妹尾義郎「光は逆境より」が併収されていた。成田とか
の子は取材記事で、ボースと妹尾は彼らの執筆した文章である。
仏教書の宣伝用パンフレットという発表媒体に起因する誇張的
脚色を差し引いても、当時のかの子の考え方を伝える資料とし
ての価値を有しているものと考えられる。

このほか、参考として以下の資料にも言及しておく。「百卷
完成を祝して詠める」(『ピタカ』三年一号、昭十・一・五 三一
頁)は短歌五首を収載(初出『現代仏教』五卷五五号、昭三・十一)。
『ピタカ』は大蔵出版の発行で、高楠順次郎監修の『大正新脩
大藏經』完結を記念した「大正藏完成記念特輯」号への寄稿で
ある。目次には「讚歌」とあり、『わが最終歌集』(改造社、昭
四・十二)からの再掲であった。

『新装きもの随筆』(双雅房、昭十三・十一・二十三)収載の「か
の子抄」(二三八―二四二頁)は内題が「ある経験」同じく「百
貨店——天地」追羽根に分かれている。鏑木清方、戸川秋骨、
菊池寛、久保田万太郎、宇野千代、森田たま等の随筆を収めた
同書は、はじめ松坂屋発行のPR誌『新装』に載った可能性が
高い。「かの子抄」は『希望草紙』(人文書院、昭十三・六)の
再録であるが、初出は未詳であった。文章の末尾に「十一年
十二月」とあることから、おそらく昭和十二年(第二卷『新装』
二月号頃の掲出と推される(未見))。

岡本かの子の全集逸文や初出誌紙は、今後もあらたに見出さ

つぎに掲出する「芸術に生くる大乘仏教道」は、『布教百科大辞典第六卷 金言聖語辞典』別冊として東方書院から発行された『金言聖語辞典付録 日本宗教 布教のしをり』に収められている。取材者による談話筆記とみなされるが、かの子の文学・仏教認識を知るのに有益な資料とみなされるので、以下に引いておきたい。

芸術に生くる大乘仏教道

浄土真宗の家庭に生育され、祖母あたりからも素朴的に、「ウソをつく人は鬼に舌を抜かれますよ！」などと教へられたもの、さうした生家の宗教的アトモスフェールは、今日の岡本かの子女史の宗教意識とは何の聯絡もないものである。

女史が真に宗教への接触を始めたのは、ずっと後年のなものであつた。やうやく成長され、やるせない自らの内的矛盾に直面された時、やがて宗教への眼が開かれたのであつた。

矢張り、年若き女性インテリの一度は辿り易い道たるキリストへの振り向きが始められた。しかしキリストの説く善悪観は、どうも合点の行かぬものであつた。

「もし、本当に神が全能であるのなら、なぜ、原罪なんかと云ふものを作られたのでせう？」

かうした疑問を以つて、岡本女史は牧師に質問されたのであつた。

「それは信仰が進めば解ることです……」

との冷たい答へでは、当時の女史の満足さる、ところではなかつた。

やがて、ふとした機会から、親鸞聖人の「歎異抄」を披見さ

る、ことになつた。この一小巻こそは、今日も亦岡本女史の「心の故里」となつてゐるものである。

純文学的教養に富まれ、女流詩人として出発された女史は、その必須条件として、感情に豊かな個性にめぐまれてゐられる。しかも肉体的にも健やかに、東洋人としては稀に見る、強くて而かもデリカな、サンシーブルな性格の持主である。良家の子女としての生ひ立ちも去ることながら、その「童心」は、先年も外遊された時など、特にフランスなどのサロンでは、とても喜び迎へられたと云ふことだ。

しかし、他面、さうした性格は実利的ではない。生活には不利益だ、との自覚も生れる。自我を貫徹せんとすれば、そこには他者とのいさかひも起らう。内的反省の発する所、痛ましい自己嫌悪も生ずる。

「自殺しようかとさへした私でした……」

岡本さんの葛藤は、正に其の頂点に達したかとさへ思はれる。此の時、力と智慧との宗教たる仏教に、ひたむきに突入されたのであつた。女史が、原田祖岳老師あたりから禅を聞かれたこともあるとかのことであるが、たしかに其処には禅機が感得される。

さすがに女性としては、感情生活のなごやかさから云つても、「親鸞さま」の宗教は、何と云つても、いたく心を惹かる、ものである。しかし研究的態度と云つては変であるが、さうした方面では禅に強く影響を受け、道元禪師はその崇敬さる、ところの一祖師である。

岡本女史は、文学的に、宗教に、仏教に入られたのである。然し今や、その日常生活に於て、生活と仏教は空氣の如く融け

事称揚、生活改善の記事が多く、時代を投影している。長与善郎の小説「春に甦る」や宇野浩二の童話「お婆さんとへうたん」等も掲載されてある。

不注意の無駄

『物ごとを上の空で見過しやり過すこと』これに反してどんな些細のことでも注意深く念を入れて観察し実行することは、必ず後で役に立つことがあつて、一生の大徳になるものである。

——『報国』第七卷第一号、昭和十三年一月一日発行
四三頁

アンケート回答。「名士回答　こゝに無駄あり」欄に記載。冒頭に「支那事変を契機として私共が直面した問題は、この事変財政経済に應ずる生活の改善」を謳い「節約すべき点」につき「諸先生方の御高説を拝聴」する旨が記され、回答者には沖野岩三郎の名もみられる。かの子は「評論家」と紹介されていた。『報国』は徳富猪一郎らが顧問の報国野間会の機関誌で、野間会本部が発行。戦時色の濃い誌面には永井柳太郎「日本国民の大使命」など国威発揚、臣民奉仕の論調で統一されている。

宮本武蔵を読み

私の弟は吉川さんの『宮本武蔵』の絶賛者で、私たちや友達に向つても、これを読まない者は小説を語る資格がないやうにまで申します。私はあまり時代小説は読まなかつたのですが、弟の熱意にひき込まれて、夕刊で拝見してゆくうちに、いつか私も他愛なく毎日の新聞を待ちこがれる読者の一人にさせられてしまひました。

他愛なくと申しましたが、それは毎日を待つ読者心理のこと

で、小説そのものの内容には初めて、時代小説にもかういふ人間に対する鋭感や、深い人生描写があるのかと感服いたしました。

わけて現代文学には、最も欠けてゐる郷土的なほひが高く、又、女性描写のうちでも、お通の心理とか、お杉隠居の子に対する盲愛などは、むしろ純文学の域をも超えた筆致で出色の出来ばえと存じます。同時にこの小説は何となく、私たち祖先の生活を、今にまざくと見展^{ひら}げてゆくやうで、慕^{あこ}かしさに血液のをどるのを覚えます。新しい歴史小説を求める声がだいぶあるやうですが、たゞ史実を並べたといふにとゞまらないで、祖先の生活を自己の血液の中に甦^{よみが}へらせてみることで、このやうな小説こそ、その意味で、ほんとの開拓的な新歴史小説といふのではなからうかと思つて、作者吉川氏になほより以上の大作をお示し下さるやう祈ります。

——吉川英治『宮本武蔵　地・水の巻』大日本雄弁会
講談社、昭和十三年十二月七日（第三十五版）発
行　広告頁

「宮本武蔵」は今日でも多くの読者に支持されている吉川英治の代表作であるが、純文学作家をもって任じていたかの子もその愛読者になつていたことは意外ですらある。かの子の歴史小説「落城後の女」（『日本評論』昭十二・十二）は「宮本武蔵」を読んで刺激を受けて執筆した可能性もある。なお広告頁は奥付の後にあるが初版（昭十一・五・十）には存せず、第何版から付載されたかは未詳である。文中で「弟」とあるのは当時岡本家に同居していた恒松安夫であろう。ここでかの子は「閨秀作家」と紹介されており、同じ欄には吉田茂の文章も併載されていた。

忘れられぬ夏の味覚

先年の夏、大阪放送局へ一週間の放送を依頼されて、行つたときのことです。船料理芝藤(川)に浮んだ大船のやうな料亭で喰べたフナのおさしみ。

——『味格』第九卷第六号、昭和十二年六月十日発行
一八頁

アンケート回答。小島政次郎、川口松太郎、テナー歌手の藤原義江ほかも回答している。『味格』は大京会発行の料理文化誌。該当号には本山荻舟「日本食の再検討」等が収載されている。かの子は「歌人」と紹介されていた。

稗播き

だんく見当らなくなるが、私のこのもの時分には、東京で『稗播き』が世間一般に流行し、ちやうどこの頃の季節に清新な情趣を添へた。

炭色の楕円形の土鉢に泥土を盛り、稗を一ぱい播き、青々と芽が出たところを稲田に見立て、陶製のおもちやの案山子だの、下り鶴を配する。垣や柴折門を作り、築山に瓢箪池など窪めたり、小さい石燈籠には灯が入れられるやうになつてゐる。器用な手のうちでは自宅で趣向してこしらへたが、縁日では初夏の売りものとして並べた。

私たちはこの一鉢を得てどんなに喜んだことだらう。その青々と萌え立つ稗の芽生は、私たちをして真に稲の苗代に感じさせ、時経るに従つて穂、葉、密生する深田に感じさせた。

私たちは鉢の中の泥土を、どんなに貴重なものに思つたらう。それあるが故に私たちの仮想稲田は分厘ぶんりんと伸びて行くのであ

る。朝な朝な、床を起き出ると、すぐ胸を轟かしながら、その伸び加減を尺度を当てて計つてみた。その一本をそつと抜いてみて、白くミシン糸のやうな根を差し出してゐるのをいかに健気に感じたことだらう。稗は強かつた。一旦抜いたものも土に押し込んでおけば根は張つた。私はほつとして胸を撫で下ろした。葉は伸びるに従つて、長短や肥瘦ができて来た。いくら水を加勢してやつても、痩せて短いところは育たなかつた。陽に当てる具合も、いろく工夫してみた。けれど稲田の丈は揃はない。私は悲しくなつた。生れて始めて『自然』の手硬いことを知つた。

仮想稲田はだんく伸びて行つた。下り鶴の背を没し、案山子の胸の辺りに及んだ。蛙かたがはの鳴く音が想像された。田雀の襲来を想像して恐れた。私は鉢の上を小さい掌で撫でてみて、一日々々、葉の先のしつかりして来て、抵抗力ができたのをどんなにか、たのもしく思つたか。私は夜螢籠から螢を取出して、このいたいけな稲田の上に放ち、虫の光で小さい一掴みの葉が灰青はのきをく照し出されるのに、どんなに胸の躍るのを感じたらう。

結局、人間の本性は土に親しみ自然に慰められるやうにできてゐるものらしい。私は今頃の季節になると『稗播き』を思ひ出して仕方がない。

——『家の光』第一三卷第七号、昭和十二年七月一日発行
七九頁

かの子の随筆のなかでも味わい深いものの一つである。「土に親しみ自然に慰められる」ところに「人間の本性」を求めてゐるところには共感が湧く。「話のサロン」欄に土岐善麿「聖女の心」他と共に収められていた。該当号には佐佐木信綱の巻頭言「一筋の道を」、友松円諦「道は近きにあり」が掲出。農

性があることを疑ふことは出来ないのです。ですから、羽子板の何処が面白いかと尋ねられたつて、答は明白にすることが出来ないのです。ただ羽子板もあの飾の多いのは使ふことが出来なくて、要するに飾りものです。實際遊ぶときは何か面白い板で製作したが、ちん／＼とい、音のするのを用ひます。羽子板の音楽的な側面とでも言ふものでせう。

それに追羽根をするときは、矢張り和服がい、と思ひます、洋服で羽子板では変ですから、といふのも羽子板が日本的なものだからです。日本人の間に、斯うしたものをなくしたくない気持はもつて居ります。

——『人形人』第二年第一号、昭和十一年一月一日

発行 二二—二三頁

かの子は、羽子板遊びに夢中になることも正月の過食と運動不足を是正するための無意識の行動だと書き、そこに合理性、必然性をみている。こうした物事の大局的な有機性を説く考え方は、仏教的な発想によつてるのであらう。『人形人』は有坂与太郎編集の人形・郷土玩具の雑誌で、建設社から発行されている。この「新年号」は「羽子板鑑賞号」であつた。

政治と文学

非常に大きい問題だから切り縮めて、ごく原則的に考へてみよう。

政治も表現であるし、文学も表現である何を表現するかといふと人間の全的なるものである。

この目的に向つて二つのものは自ら方法が違つて来る。政治は具体的なものを採用したがるし、文学はどうしても象徴的になる。

具体的なものは現実の機構性能上、効力の程度や範囲に制限がある。無限だの無窮の効力ある具体なるものはない。象徴はその点に於て自由である。永遠をも超大をも効果せしめることが出来る。但、すでに象徴である。その媒介の条件性を受容しない対象に向けては効果を伝へることが出来ない。

云ひ変へればユートピアである。政治で一時に絶対のユートピアを実現しやうとすれば必ず失敗する。そこに具体的なもの、問題が介在するからである。文学でユートピアを語ることは易々たるものである。抽象象徴だからである。

こゝに仕切りのあることを知らずして、文人政治に足を踏み入れて臍を噛み、政治より文学に逃れて蘇生する。ダンテ、バイロン等がさうである。

ゲートは双方に才能があつたといはれるが、ゲートが政治的手腕を試みた政治地理的範囲は彼の文学的領域に較べてどれほどのものでもない。彼はやはり文人であらう。

しかし、文人の文化的精神で政治を適度に刺戟することは常に棄である。

——『インテリゲンチヤ』号数なし、昭和十二年六月

一日発行 九—一〇頁

政治と文学の違いを「象徴」をキーワードにして論じた評論で、かの子の文化観の一端を物語る。『インテリゲンチヤ』は近代書房発行。「特輯 政治と文学 文壇と党派」号で「六月号」とのみ表紙に記載してあつた。「編輯後記」には「第三冊目」とある。岡田三郎「政治と文学」、高見順「政治と『政治的』」といった十六編の特集用の評論や、永松定「上海だより」等が掲載されている。

昭和九年は釈尊生誕二千五百年、弘法大師没後一千一百年にあたり「仏教ルネッサンス」の機運から多数の仏教書が刊行されていた。

有賈マダムは何がお好き？

- 一、好きなものは、新しい魚や熱い鴨のおいしい物、コンビーフ、鮎の塩焼、嫌いなものは固いものや、なまこです。
- 二、外国は涼しいものですから、薄い物でも結構ですが、日本では汗が出るので洋服は困難です。下着はリウツとした汗をはちくものをつけて、外国では贅沢なものがレースの服を着ます。靴下は純絹ですと汗でぐつしよりなりますから、幾分毛か人絹が交つてゐるものがよいと思ひます。夏になりますと本当に日本服が羨ましいと思ひます。

- 三、身長 五尺一寸位

体重 十六貫百もんめ匁位

——『婦女界』第五〇巻第二号、昭和九年八月一日

発行 三〇九〜三一〇頁

アンケート回答。『婦女界』は婦女界社発行、該当号は「簡易銷夏号」で、夏季の主婦の行なうべき生活の工夫についての記事が目立つ。アンケートの目次には「名流七婦人」とあり、かの子は「歌人」と紹介。標題脇に「『有賈マダム』とは、みごとにお太りの御婦人といふことに御解釈下さい。」との編集部からの注記が付してあった。続いて「お問ひ合せ」として

「一、あなた様の御好きなものと御嫌ひのもの（夏の食物で）」

「二、真夏の外出には、どんな御用意をなさいますか。」

「三、あなた様の御身長と御体重は。」との質問が記載。かの子の食物の嗜好や夏の服装への配慮と併せ、当時の身長・体重を

一五五センチ、六〇キロ「位」と自己申告しているところが興味を惹く。

羽子板

羽子板の想ひ出をと言ふお話でしたが、私には想ひ出と言ふ程のものがありません。強いて想ひ出せば、と言へば何んだか変な言葉ですが、昔から追羽根が好きで今でも毎年、新年になると遊びます。ですから羽子板と共に新年の感を味つて来たと言ふことが出来ると思ひます。こんな風ですから想ひ出と言へば、昔は出入の人が沢山羽子板を持つて来られたのですから、随分色々なものを持つて居ました。併し、それも先年ヨーロッパに行つたとき、向ふの人が非常に珍らしがつてゐられたので、大部分差上げてしまつたのです。又今でも便りがあれば御送りして上げるのです。

私か今も追羽根をすると言ふと妙に感ずる方がゐられるかも知れませんが、私は凡てのものに必然性と言ふものがあると思つてゐます。と言ふことは凡てのものが有機的だと言ふことなのです。例へば花が蜜をもつてゐる様に。何でも必然性があり、合理性と言ふものがあるのです。羽子板もその例に漏れてはゐないと考へて居ります。それはお正月皆が家に入つて、食べるものだけはどうと食べる、そうすると自然と運動不足になるのです。ですからそれを補足する意味で、屋外に出て運動をする訳です。追羽根も結局一つの運動ですから、それを取上げて云々と論議をすることは饒舌家の仕事でせう。人間は必ず価値のある、有意義的なことばかりして生きてゐるのではなく、唯だ面白くと言ふだけで、夢中になるものもあると思ひます。併し、根底には無意識の中に、そう言ふ行動を取らせる合理性、必然

女子青年会宛の私信といえるもの。「かの子抄」は、かの子が同誌に執筆した一連の随想の一つで、それらの多くは『かの子抄』（不二屋書房、昭九・九）に収録。「仏教を求むる女性へ」は若い読者を意識した教訓的な内容になっている。「仏教女性に与ふる言葉」と「戦後に於ける覚悟」はアンケート回答で、後者は日中戦争のさなか、「銃後」での生活意識について回答を寄せたものであった。

三 その他全集逸文の紹介

ちくま文庫版全集の完結後、入谷清久『岡本かの子 資料にみる愛と炎の生涯』（多摩川新聞社、平十・五）第二部において紹介された全集未収録資料は、かの子研究にとつて非常に有意義かつ豊富な内容であった。ここでは同書に未掲載の全集逸文を記載しておくことにする。

深更弾琴

とざされて銀河も黒き深き夜の闇より起る琴の音かな
打ち沈みはた早走りて琴の音のこころを闇にうちまかせつつ
ひとところ涼々として琴の音の流るればいとよ真闇ふかしも
今宵はた蟲も啼かざり一点の琴のひびきにもだすあめつち
いみじくも琴は高鳴る更たけて饒舌の世の静まれるとき
一線をゆるがせにせぬ琴の音いみじく闇にひびき出でけり
もの言はぬ二時あまりやがて聞く琴こそひびけ心しみじみ

服薬

眼をねむり苦き薬を一息に呑みほしてまたもけふの日暮るる

——『淑女画報』第八卷第一二号、大正八年十一月

二十日発行 二七頁

「深更弾琴」は初出では全十二首で、末尾に「——八、九、七作——」と付記。そのうち後半は内題「服薬」の五首で、第一、三（五首が『浴身』（越山堂、大十四・五）に収録（とかけ）内題「ながやみ」第九（十二首）された。『淑女画報』は博文館発行の婦人誌。オフセット版等の「画報」や皇室関係の記事など、また田村松魚「二代目幾松」や大倉桃郎「心の家」といった小説が掲載されている。闇夜に響く琴の音を観照した歌群には幻想的なイメージと心の奥底を見詰める詠み手の情緒が漂う。特に第一（四首）は秀歌である。

「法句経講義」を聴きて

釈尊の金口より流露した断片的なひらめきに深い理解をふくめ乍ら殊に、現代生活との交渉に留意して平易明快に説かれた氏の教学体験の力量と深みに感心しました。因に、私は氏の教意拡宣の態度に、氏独特の気品と伶俐さを感じ、常に氏を現代の新らしき布教家中よりの選手的出現と信じて居ります。

——友松円諦『仏教聖典 法句経講義』第一書房、

昭和九年四月十五日発行 カヴァ

推薦文。同書のカヴァには書名・著者名のほか「J O A K より放送し、数百万の聴取者を感じさせた近來の名講演!!」との宣伝文句が記され、裏側には「『法句経講義』を聴きて」の総題で佐々木信綱の歌、柳原燐子・かの子の短文が印字されている。また陸軍中将・堀内信水の「青年男女必読、熱血ほとばしる講話」、文部省宗教局長・下村壽一の「教界の爲め、世道人心の爲め、無上の仕合」も併記してある。かの子は著者である友松の「法句経講義」をラジオで聴いていたようである。なお

多いのは一考を要すること、思ふ。即ち後者は人生の末梢事に拘泥して根本義を体得しないからだと思ふ。

勿論文化は現代人の日常生活に多大の利益を与へてゐるが、人生といふもの、眞の意義を悟り、人生を正しく処する覚悟が決定された上で文化を探るのでなければ却つて弊害がある。暫らく末梢の文化を圧えて、永年の人生経験者か、又は人生を眞剣に送つてゐる善男善女達のの中に入つて見るがよい。彼等は現代の智識人に体験に依る眞の人生を教へるであらう。現在仏教を信じてゐる老人達の中に嘗ては青年時代仏教をけなした者も多いであらう。それが今に至つて何故もつと早く仏教信仰に気付かなかつたかと悔めてゐるのである。幸福な近道があつたのに遠廻りした事を悔めてゐるのである。私たちはその幸福への近道を人生の先輩に教へられてゐるのだから、わざ／＼道草を食つて廻り道するのを止めるべきだ。道草食ふのは愚かな事であるばかりでなく、恐ろしい迷ひに襲はれる危険がある。若き女性が今直ぐにも先輩の言を信じ、或ひは先輩の様子から推察して仏教に向はれんとするのは誠に賢明な心意気である。仏教によつて生命の根本義を把握され、之れに加ふるに現代の最新智識を活用されて行くならば諸嬢は全く仏教の目ざす絶対の幸福に年若くして到達出来るのである。

さて、それでは愈々仏教を求められるに當つて先づ何れの教義宗門から入つて行かれる方がよいか、仏教学の窮極は生命学の一大真理であり、仏教の目ざす処は人格の完成、とりもなほさず、絶対の幸福であるから何れから進まれても最後はこの窮極目的地に達するのであるが最も自然の入信方法は各自の性情とか都合に相応はしい一教義、一宗門に親しまれるのがよい。此の鑑別は別に難事でなく、要するに自分の好きなもの有難く

思へるものを信仰されるがよい。又祖先代々信仰された教義宗門があるなら、それを探るのが順当であらう。

さういふ事が有縁の証拠である。たゞ茲に注意しなければならぬことは、仏教は学問ばかりでは決して目的を達せられるものでないといふ事、時には浅薄な学問によつて妨げられることすらあるといふことである。つまり仏教は信仰体験の醇熟するに従つて達成されて行くものである。

何処かの検定試験でも受けるやうに勉強ばかりで得られると思つたり、又世の中の事、何事も不可能事は無しなど、何か事業でもやるやうな頑固な思ひ上つた心構えで仏教と取り組むのでは自分の「我」が邪魔をして外道に墮つるばかりである。素直な自由な気持で絶間なく信仰体験を続けて行く。そのうちにおのづから救はれてゐる。之れが仏教信仰の要諦である。

以上賢明にも仏教を求めんとする女性を祝福し、些かの注意を呈する次第である。

——『アカツキ』第一一巻第九号、昭和十年九月二十日発行 七〜九頁

戦後に於ける覚悟

明るく凛々しく生活すること。

——『アカツキ』第一四巻第一号、昭和十三年一月二十日発行 一七〜一八頁

『アカツキ』誌は武蔵野女子大学仏教文化研究所で閲覧させていただいた。なお追悼文「潮留延子女史素描」の潮留延子は仏教女子青年会の初代幹事で、若くして病死したが履歴は未詳。昭和四年六月十六日に追悼会が催されている。「岡本かの子女史より」は昭和四年十二月から欧米旅行に出発する前の、仏教

二つのうちのどの真理に就こうとするだろう人々は。どちらへも就け、どちらへもつくな。(九年十月記)

——『アカツキ』第一〇巻第一〇号、昭和九年十月

二十日発行 一七〜一八頁

仏教女性に与ふる言葉

勝鬘夫人はどんなに美しく賢かつたでせう。近代仏教女性も亦充分美といふことを心掛け度く思ひます。これはお金をかけて美装をすること、は違ひます。感覚を鋭敏にして老は老、若は若なりに女性の生命の美を忘れぬ事は仏意にかなふ一条件です。じみにつくすることをわざと誇りとしたり、甚しきは他の美貌をそしり自分の醜貌を逆に効果あらしめる為にわざと粗暴に振舞つて如何にも悟つたやうな態度をしたり愚の頂上です。自らの容貌をねんごろに育めば醜婦必ずしも醜婦ではありません。

——『アカツキ』第一一巻第二号、昭和十年二月二十

日発行 一五〜一六頁

仏教を求むる女性へ

今茲に仏教を求むる女性がありとすれば彼女が若ければ若い程よくも彼女が其処に氣付かれたとその志に對し私は敬愛の念を禁じ得ない。何故と言つて彼女は少くとも偽らざる内心に素直に耳を傾けた女であり、殊に若い女性が仏教を求めるに於ては余程真剣な氣持の上の事であらうと察するからである。

仏教を象徴するのに古来の伝統形式をその儘継承し、又、仏教を求むる人達が多く老年の男女とか、比較的新智識の少ない旧陋な人達であるといふことなど、仏教を旧式のものと思はせ、

新時代に適さないやうに考へる人達が多い。然しよく考へて見るがよい。老人だからとて輕視してよいであらうか。成程、老人は所謂新時代の末梢の尖端文化に對して現代の青年淑女達のやうには知つてゐないであらう。しかし、人生を生き抜いて来たといふ多年の経験に依つて、青年淑女達よりもつと人生の根本に触れ、その辛苦をつぶさに嘗めてゐるのである。

斯かる体験の後に於て仏教を求めるといふことは、其処に必ずや重大な理由が在るに違ひない。決して自分一個の死後の安樂を願ふばかりではないのである。希求し、期待した人生上の諸事件が思ひ通りに行かず、或は恐れ失望した諸事件が案外的好展開を見せるときなど、その人生の長い経験者達は、浮世の不如意を嘆きては手を合せ、望外の救ひに手を合せては感泣したのであつた。何物に向つて手を合せたか、見えざる大いなる天地間の力に向つて、あらう。それこそ大宇宙を進転させて行く生命力、仏を念じたのである。日本の伝統宗教は仏教であり、その教へるものは大宇宙の救済力であることを知つて老人達は遂に日夜に仏教に頼つて初めて安住の立場を見出したのである。最早や彼等の眼には仏像の古色も寺院の抹香臭さも決して旧式に映じないのである。否その旧き伝統の長きによつて益々永遠不壞の真理であることを確認するのである。

又近代智識に乏しい所謂善男善女が仏教を願求するに於ては、その素直な信仰によつて自心の中に潜在する仏性を取り出すのである。これは煩雜な世に、ともすれば捲き込まれんとする心の乱れを整理し、又、心を澄すことにより仏性の直感力を働かせて、自分の足らざる智識を補ひ、ひたすらに真人間の生活を送つて行くのである。彼等にして間違ひなく人生を喜び迎へて行くのに比して智識人の中に却つて間違ひの人生々活者の

潮留さんは私が単に情感の世界ばかりに生きて居ないことを
仏教的な教養からひそかに眺めて居られたのであらう。口にこ
そ出さね事実、私の文学者生活の一方に他の世界が私の内部に
確存して居たのを知らないのは文学者の友達で殆ど知悉して居
て呉れられたのが潮留さんであつたやうにさへ思へる。

遮莫、とにかく潮留さんに就いての私の記憶は親しくて爽や
かである。潮留さんとの接触面を以上よりほか私は持たない。
潮留さんに私の如らない他の性行のどんな部分があるか、まし
て私は潮留さんの内生活など皆目知らない。或はある意味で非
難すべき点が潮留さんにあるにしても今後私が万一それ
を他から聴くにしても私にその方を憎悪し指弾する心は恐らく
起らないだらう。澆漓たる躍動的生命はそれ自身既に一つの美
的存在として批評以外の好感が持てる。(昭、四、五)

——『アカツキ』第五卷第六号、昭和四年六月一日

発行 六四、六六頁

岡本かの子史より

「みなさまで御見送りありがたう。御厚意わすれません。私、
船酔ひも別に致しませず茲まで参りました。「アカツキ」をも
忘れずに居ります。みなくさまの御健勝をいのりあげます」

——『アカツキ』第六卷第二号、昭和五年二月一日

発行 二五頁

かの子抄

○

秋深くして連日降りつゞく冷雨。

私は眼をとぎして冷雨の音をふかく聴き入つた。聴き入りつ

つ私はふとおのが掌を額にあてた。冷い額が驚いたのである
——私の掌はこんなにも暖であつたかと。

人は平常、自分のうちにあるよいものを忘れてゐる。忘れ勝
ちである。真理は捨ふ人によつては路傍にさへ落ち転がつて居
る。まして、尊い自己の裡に潜む仏性に気づかなくてはならな
い。人間は弱くてとかく他にもとめ易い。一度うち、に意を潜め
まなこを向けて、無限の仏性を開拓しようとするところざした者
は強い。

○

どんなにひいきめに視ても日本人が他人の欠点をあくせくひ
ろつてあるくといふことは否めまい。近日も或る人が或る人の
事を云つて居たのを聴いて居た——あの人は昔あんな事をした
のに今は宗教家ぶつて——などと。だが、私はそばでだまり乍
ら潜におもつて居た。むかし、あの人があんな事をしたからこ
そ、今、あの人は宗教家になつて居るのだ。むかしのあんなこ
とが今のその人をつくつた事を知らないのだらうか。と。

人の昨日を見て、今日を解さない人が多い、まして人の過去
及び現在のみを視て明日をはからぬ人の多いのは是非もないと
云はうか。

○

四海はみな親子だ、なにも自分の子だからと云つて殊に可愛
がるというものは無い。

これも真理であらう。

この世に於て自分に一番身近く生れて来た因縁を持つ我子で
ある。さし当つて先づ一番愛情をつくすのはあたりまへである。

これも真理であり。

出た人の紹介状を持つて訪れられた。私はまだその頃女子仏教会の存在をよく知らなかつた。まして内容や性質を知るべくも無かつた。

取次ぎの女中が玄関に出たかと思ふ間もなく快活な綺麗な声があまじ綺麗で無い私の女中の声と応酬を始めた。それが玄関とかなり離れた茶の間に居た私に聞えて来た。

意外に思つた。私は今までの仏教婦人の先入感に私の大部分を占められて居たから、私のそれまで接した仏教婦人会には其様な声は交つて居なかつた殆ど絶無であつた。若い仏教婦人——私——の心はほの／＼とした。

逢ふとふくよかな三十格好の婦人であつた。肌の色の好い、着物の着つけや色の配合などもよく意を用ひてあるのが分かつた。

何をお話ししたか、とにかく朗かにお話しした。そして何かを私にたのんで行かれた。何かわすれてしまつたが私は直ぐにお頼みに応じたやう覚えて居る。

二回目、三回目の訪問に私は何をお話ししたか殆ど忘れてしまつた。けれどあの華やかな笑ひ声や朗らかな談話の感じがはつきり私に残つて居る。

最後に——大正十四年の初夏(?) 潮留さんは好く似合ふ洋装で見えられた。その時は私に先客があつた。女流文学者の先客であつた。いつもは来られる早々からはしやいで賑やかに話される潮留さんが、おとなしく椅子に倚つてその女流作家と私との談話をだまつて聴いて居られた。潮留さんの若い心が有名無名といふ差別にかなり支配されて居られたことも私に一種の愛感を抱かせた。若いと云つても恐らく私と幾つも違つて居られなかつたらうけれどもなまじい早く世間へ出されて仕舞ひひ

ろ／＼社会的な責任の多い或意味での虚名に疲れた私から見れば羨しいやうな気がした。

「——私、先日、何々の会へ行つて見ましたの」とか

「誰々さんを訪問して見ました処がねえ」

とかそれについての好奇心をはつきり見せてよく私に談られたのにも私には決して野心的な慾望の卑しきには聴えなかつた。否、私はむしろ潮留さんに概念的仏教に縛られて仕舞はない自由な体動が見えてうれしかつた。

「その野心を仏教運動の方へ思ひ切り出して下さい。」

私はこんな気もちで潮留さんのパシヨンに承接して居た。(野心も亦善き方向に送らば人生の好餌であることは勿論大乘仏教の極則に於て認識されて居る処である) 事実潮留さんは随分積極的に女子仏教青年会の為に働いて居られたやうである。帝大仏教青年館に於ける女子仏教青年会の新年宴会などでも派手に華やかに司会の辞など述べられて居た。

容貌、風采、性質など、ばつと派手なやうですがに仏教の濃やかさにも養はれて居られた。私の家で女流作家と落合はれた時もその女流作家が、また他の女流作家が私を評した言葉を私に移した。「——××子さんがね、かの子さんも今が真盛りの花といふものね。と云つて居られましたわ」

私はその頃かなり彪大な第何輯目かの歌集を出し、祝賀会や批評に世人からかなり騒がれて居た。と、潮留さんはその言葉をその女流作家が先きへ帰つて仕舞つたあとで私に持ち出された。「私はね、あなたはこれからの方だと存じます、今までよりも、今よりもつと本当の力をあなたは出しますわ、もつと／＼盛りに立派におなりになると思ひますわ。」

ございました。

秀子は、もう君ちゃんを思ひ出しても悲しくなるやうなことはありませんでした。それに、もうお姉様のところの赤ちゃんが、少しづつ、笑ふやうになつて、だんだんかはいくなつて来ました。お姉様がいらつしやる度に秀子は、大喜びで赤ちゃんを抱っこしました。そしてお母様がお笑ひになりながら、「秀子。お人形はもう欲しくないの。」とおつしやつても、

「私、ほんとうの赤ちゃんの方が好きですわ。」と、はつきりお答へいたしました。

(をほり)

——『良友』第四年第一一〇号、大正八年十一月一日

発行 四八―五三頁

「赤とんぼ」「秀子の人形」は神奈川県立近代文学館所蔵『良友』から見出された。

ここで両作について付言しておく。「赤とんぼ」には一人遊びが好きで、繊細で優しい心根を持った秀子という少女が登場しており、「秀子の人形」と同じ主人公とみなされる。群れ飛ぶ赤とんぼに、つい「ひきつけられ」追い駆けて行ったが、知らない間に大切な「緋の帯」を落としてしまった秀子は、それを探し疲れて居眠った捨石のところへ飛んで来た、羽の欠けたとんぼによって在りかを教えられる。ここで秀子は「もう二度ととんぼの群を追ひかけるやうないたづらはしまいと考へ」、手厚く傷ついたとんぼを飼育した、という内容であった。

そこからは「秀子の人形」の人形を洗う場面にみられたような、心機を転化を導く際の、ある種残酷な出来事は描かれてい

ない。「赤とんぼ」の場合は日常のほんの一齣といつてもよい出来事である。しかし、一匹のとんぼの優しさへの感受は、やはり特殊な体験といえよう。その後は気まぐれな行動を控え、生き物を労わろうと考えるようになった秀子の行動と心理からは、道徳的な自制心と愛育心を自得する幼児の通過儀礼的な心の成長過程を見出すことも可能である。この点は「秀子の人形」との共通項と考えられる。このように両作は、読み手に正しい愛情の向け方を感得させようとした、童心主義的な観点から創作された作と評価しうる。そうして一途な愛着が実は迷妄であり、それが否定的契機によって健全な状態へと転化するという「赤とんぼ」の構想は、後年のかの子文学に顕著にみられた「迷妄の浄化」の構想とも通底しているのである。

二 雑誌『アカツキ』岡本かの子著述

『アカツキ』と岡本かの子については、拙稿「岡本かの子と高楠順次郎―雑誌『アカツキ』の周辺―」(『滋賀大國文』三六号、平十・九)を参照されたい。同誌はかの子の「大蔵経」講読を指導した高楠順次郎が主宰した仏教女子青年会の機関誌で、大正十四年一月から昭和十六年十月まで全一七巻、一七〇号まで発行された。

「岡本かの子と高楠順次郎―雑誌『アカツキ』の周辺―」補註に記した『アカツキ』掲載のかの子の著述のうち、全集未収録の散文(含アンケート回答)を以下に紹介しておく。

潮留延子女史素描

潮留延子さんに私をはじめしてお目にかゝつたのは、大正十三年の秋の事であつたやうに覚える。私の知己の帝大印度哲学を

うになりました。

ある晩、秀子がお母様と一しよにお湯に入つてゐた時でした。お母様のお膝の上に抱かれながら、ふとこんなことを思ひ付きました。

「お湯に入ると、お母様のお肩だつて私の胸だつて、こんなに温かく柔かくなるんだもの、君ちゃんもお湯へ入れたら、きつと体が温かくなるわ。」

そして秀子は、その上かう考へました。

「それにこの頃君ちゃんはお鼻のわきだの、眼の上だの、少し黒くなり出したから、ついでに洗つてやればいゝわ。」

そこで、そのことをお母様に話しました。するとお母様はおつしやいました。

「まあ！ 人形にお湯なんか。大へんなこと。」

何が大へんなのか秀子にはわかりませんでした。けれど秀子は、その上たづねようともしませんでした。そしてそのまま何かにまぎれてしまつて、君ちゃんをお湯に入れてやらうとしたことも、それなりにをりました。

けれどそれから四五日あとの夕方でした。君ちゃんをおんぶしたまゝ、裏の野で遊び疲れた秀子が、野川のへりを歩いてきました。ちやうど今お日様が沈むところで、その光を受けた一ひらの雲が、緋鯉の脊の色のやうにあざやかに、野川の水にうつてゐました。

その時、秀子はふと思ひ付きました。

「さうだ、私、君ちゃんを、お湯のかはりにこの水で洗つて、もつと好い児にしてやるわ。」

秀子はすぐに君ちゃんを脊からおろしました。そして君ちゃんのお衣をとつて、君ちゃんを水へ入れてやらうとした時、秀

子の手はひやりと水に触れました。でも秀子は夢中になつて、君ちゃんを水の中に入れてしまふと、袂からハンケチを出して、顔から体をごし／＼と洗ひはじめました。

ところがどうでせう！ もつと白く美しくなる筈の君ちゃんですのに、その顔や体の肌から、だんだんと赫黒いかすり傷のやうなものが現はれ出しました。秀子は、「おや」と思ひました。そして、その汚れを落さうと、なほも力を入れて洗ひますと、君ちゃんの体は一そうざら／＼したものになつてきて、しまひには顔の眼も鼻もなくなつたやうになりました。

「あら！ あら！ あーら。」と秀子は、その君ちゃんをか、へて、お家へ走つて行きまし
た。そしてお母様を見つけると、そのおそばへ駈けていつて、
オイ／＼と声を立てて泣きました。

「まあ！ しかたのない秀子。」

とお母様はお叱りになりました。けれど又お母様は、眼も鼻もとれてしまつてへんでこな君ちゃんを見ては、どうしても笑はずにはゐられませんでした。

その翌年、秀子は学校へあがりました。秀子はもう尋常一年生なのでした。或る日、綴方の時間の時に先生が、「人形」といふ題で、人形はやはらかい土を練つて作るといふことをお話し下さいました。

その時秀子は、ふと去年の君ちゃんを思ひ浮べました。そして自分がさん／＼泣いたことを思ひ出しました。「ぢや、あの君ちゃんも土だつたわ。」と、秀子はそつと自分にさゝやきました。先生がさうおつしやつたのを聞いて、始めて君ちゃんといふものの体が、何であつたかわかつたやうな気がしたのでご

ばめたやうに付いてゐる唇、すべてつや／＼として、今にも鈴のやうなやさしい声をして笑ひ出しさうな君ちゃんでした。それは全く、ほんとうの女の児のやうな君ちゃんでした。その大きさも、ちやうど人間の赤ちやんぐらゐ。

この君ちゃんをおんぶしたり、抱つこしたり、またはお飯事のお客さまにしたりして、秀子が遊ぶやうになつてから二年はたちました。

ある日、お母様が、

「秀子は、ほかの玩具はぢき悪くするのに、君ちゃんばかりは大切に、何年たつても指一本折らないのだから、」

と、つく／＼感心したやうにおつしやつた時、

「あら、母ちやま。指も折らないつて、きまつてゐますわ。指なんか折つたら、君ちゃん泣くぢやありませんか。折つたら真赤な血が出ましょ。」

と秀子は申しました。君ちゃんの指を折らないことを、お母様が何故そんなに感心なさるのか、秀子には不思議におもはれませんでした。

また一年がすぎました。その間に秀子のお家から町一つほど離れた処にお嫁にいつていらつしやる御姉様が赤ちやんをお産みになりました。或る日秀子は赤ちやんを見に、お母様に連れられて行きました。赤ちやんは丈夫さうな男の子でした。

秀子は大そううれしがつて、赤ちやんの顔をじつと見入りました。赤ちやんは、ちよびつとした鼻の下に申しわけのやうに付いてゐる薄い唇を、もぐもぐさせてをりましたが、やがて細く眼をあけるかとおもふと、真赤な顔をもみくちやにして、「ぎあ——おぎあ——」と泣き出しました。するとお姉様がかけよつて、「お、もうお腹がお空きでしょ。」とおつしやいなながら、

お乳首ちちぐさを赤ちやんの唇へくはへさせました。すると赤ちやんは、それをちゆつちゆつと吸つておとなしくなりました。

けれど秀子には、何だかつまりませんでした。「私やつぱり君ちゃんが好い。この赤ちやんは男の子だから、あんまりかはいくのかしら。」と思ひながら、やがてその場を立つて行かうとしますと、お姉様がおつしやいました。

「さあ秀ちやん。せつかく見にいらしたのですから、ちよつとお抱つこしてごらんさい。」

赤ちやんを抱くのは、生れて始めてのことでしたから、秀子は急に又珍しくなつてきました。お姉様は、赤い産着にくるまつてゐる赤ちやんを、秀子の膝の上にのせました。秀子は両手をまはして、赤ちやんの小さな体を抱きとりました。すると、ほかほかと温かくつて急に赤ちやんがかはいらしくなつたやうな気がいたしました。秀子は自分の頬を、赤ちやんの頬へそつと当て、みました。すると、その柔かいこと！

秀子はお家へ帰ると、お座敷の隅に寝せてあつた君ちゃんのそばへ行きました。そしてかけて置いた蒲団をのけると君ちやんは、やつぱりお色が白くて、お姉様の赤ちやんよりも美しい、かはい、顔をしてをりました。秀子は君ちやんを抱きあげました。すると君ちやんの体は大そう軽うございました。それに脊なかのところは固うございました。それから頬にさはると冷たかったです。

秀子は、それらが何となく物足りませんでした。

「君ちゃんのお手々や、あんよは、何故カチャ／＼と音がするの。」

秀子は君ちやんを軽く叩いてみては、こんな独り言をいふや

した。眼をうるませながら、もう帯はあきらめて、お家へ帰らうと思ひました。

秀子は立ち上りました。するとその時、ふと一匹の赤とんぼが、ひらひらとおほつかない飛びやうをして飛んできました。とんぼは秀子の前をよこぎりしました。けれど羽根でも痛めてあるのか、まもなく飛行機のおちるやうに四五間さきの草の中に落ちてしまひました。

「あら！ かはいさうに。」

立ち止まつて見てゐた秀子は、かう声を立てると同時に駆け寄つて行きました。そして落ちたとんぼが何処にゐるかと思つた時でございました。ふと赤い帯が見付かりました。帯は、地べたに長くなつてゐて、その端つぼは、ちようど傍にある浅い水たまりの中にひたつてよごれてゐました。よく見ると、その辺は、さつき夢中になつてとんぼを追つていつたところでした。落ちてゐる帯のそばの草も、草花も、ところどころ踏みつけられてをりました。秀子はすぐに、露草の茂みの間に挟まつてぶる／＼ぶるぶるともがいてゐる赤とんぼを見つけました。拾つてやると、どうしたものか、とんぼは羽根のさきをちぎり取られてをりました。

秀子は、とんぼの羽根をやさしく撫でた時、直ぐかうひとりごとを言ひました。

「このかはいさうな赤とんぼは、帯をなくして困つてゐるわたしのことを思つて、こゝへおつこちて、知らせてくれたにちがひないわ、こんな怪我をしてゐるのに、よく飛んできて教へてくれたのね。」

秀子は、もう二度ととんぼの群を追ひかけるやうないたづらはしまいと考へました。そして自分の足もとに踏み折られてゐ

る草や草花を見た時、かはいさうなことをしたと思ひました。野は、とんぼ達のお家のやうなものだもの、それをちよつとも荒らすやうなことはよくないことだと覺りました。

秀子は、帯と赤とんぼを拾つてお家へかへりました。とんぼは、さつそく籠へ入れて、餌をやり、死ぬまで飼つてやることにしました。

あくる日、秀子の緋の帯はお庭の物ほし竿にはされました。まもなく、そこへ四五匹の赤とんぼが飛んできました。そしてやつぱり気楽さうに、面白さうに物ほし竿に止まつたり、飛んだりしてみせました。けれど秀子はそれを見て、たゞ黙つて笑つてゐました。

(をはり)

——『良友』第四年第一〇号、大正八年十月一日発行
四八〜五二頁

秀子の人形

秀子は一つの人形を持つてゐて、君ちゃんと呼んでをりました。秀子は、その君ちゃんは何処から来たのか、何時生れたのか、そんなことはちつとも存じません、また誰もそのことををしへやうともしませんでした。けれど秀子は、たゞ、その君ちゃんがかはいくて、かはいくてなりませんでした。君ちゃんのかはいらしさといつたら、とてもその辺の玩具屋に並んでゐるやうな、ありふれたお人形とは較べものにならないのでございました。

ぱつちりとした眼の中に、くる／＼と澄んでゐる瞳の色、ふつくらとした両頬をく／＼り合せたところに、赤い花びらをちり

赤ま、草や、つゆ草や、野菊、撫子などを両手に一ぱい摘みためた秀子が少し疲れて、向う田圃でんぼにわかれる路の角にある捨石に腰をかけて、うつとりとなつてゐました。すると、その眼の前をすーい、すーいとかすめたものがございました。

「おや！ 赤とんぼ！」

と思ふより早く、秀子の細めてゐた眼がにはかにぱつちりと開きました。すると、また一つ、それから又一つといふふうに、幾つとも数しれないたくさんの赤とんぼが、薄い羽根をひらり、ひらりと光らせながら、高く低く、また横に斜に、野の中を飛び交つて行きました。その様子は、いかにも気楽さうに、面白さうに、何処から来て何処へ行くといふ心配もないやうにみえました。秀子はそれを見てゐるうちに、ひきつけられるやうな気持になつて、ひとりであとを追うて走り出しました。とんぼの群は足音に恐れてでせうか、忙しさうに離れたり、続いたりして、逃げまどふ羽根のひらめきが、日光にかざやいて、一そうきれいに見えました。

秀子は夢中になつて追ひかけました。

とんぼ達は一生けんめいに逃げました。

畑をすぎ、丘を越え、田のくろをよこぎりながら追つてゆくうちにやがて秀子はぱつたり足を止めなければなりません。幅の広い一すじの野川が、秀子の前によこたはつてゐました。それはとても秀子のやうな女の子には、飛び越えることの出来ないものでございました。

橋がないのかしらと、秀子は野川の上下うへしたを見廻しました。けれど橋らしいものは一つも見つかりませんでした。たゞ澄みきつた平な水が、どこまでも長く尽きないやうに流れて行くのでございました。

秀子は困つてしまひました。そのうちに、とんぼの群は次第に遠くなつて、やがてかすかな影も見えなくなつてしまひました。ふと気がつくとき秀子の手には、せつかく摘みためた草花がもう一本も残つてゐませんでした。けれど、秀子はそれよりも驚きました——といふのは自分の腰に、房々と結びさがつてゐた緋の帯が、いつのまにやら何処かへ落つこちてしまつてゐるのです。

「おや／＼！ どこで解けてしまつたのかしら。」

とんぼなんかは忘れてしまつて、秀子はしよんぼりと立ち止まりました。

「まあ大へんなことになつてしまつたわ！ あの帯には、お姉様からいたゞいた銀の鈴もついてゐるし、お母様が縫ひこんで下さつた神様のお札もあるのに。」

秀子はいつとごとを言ひながら、どうしても探しあてなければならぬと思つて、大急ぎで、もと来た方へ足を返しました。又田のくろを横ぎり、丘を越え、畑をすぎて……

けれど帯のゆくへは、ちつともわかりませんでした。秀子はうろ／＼しながら、そこらを探し廻つてゐるうちに、だんだんと心配になつてきました。足も疲れてまゐりました。そして初め、赤とんぼを見つけた捨石の所まで来た時分には、こらへきれなくなつて、ぱつたりと石の根元の草の上に坐ると石の上に両手を重ね、その手に頬を押しつけた儘、うと／＼と眠り込んでしまひました。

* * * * *

どのくらゐ眠つたでせう、眼がさめた時には、はやお日様は向うの森に入りかけてゐました。秀子はさびしく悲しくなりま

岡本かの子全集未収録資料紹介

外村 彰

一 初期童話「赤とんぼ」「秀子の人形」

岡本かの子は「処女作」とされる小説「かやの生立」(『解放』大八・十二)以前にも「幼年小説」として「秀子の人形」(『良友』大八・十一)を発表していた。同作や掲載誌等をめぐっては、拙稿「岡本かの子初期童話の構想―『秀子の人形』『テスの話』遡及―」(『立命館文学』平十六・十)で「テスの話」(『童話』大十・六)と共に論及したので、詳細は参照されたい。しかるに今回、「秀子の人形」発表前月の『良友』大正八年十月号に、やはり「幼年小説」と目次に記載された「赤とんぼ」の存在を確認し得た。

「赤とんぼ」は、現在のところ岡本かの子の散文における第一創作と考えられる。四百字詰原稿用紙に換算すると約七枚弱の分量であり、掲載頁は二段組で総ルビ、挿絵三つ(露草の花、蜻蛉と薄に藤袴、捨石にもたれて眠る秀子)が付されていた。ちなみに大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典第一巻』(大日本図書、平成五・十)の土居安子「岡本かの子」には、すでに『良友』誌上に短編童話「赤とんぼ」(一九)と明記されていた。しかし項目執筆者は該当号を未見で、筆者も現物確認の際に同じ号の目次頁の「のど」を見落としたため、今日まで「赤とんぼ」実見を怠った仕儀となった。ついては他日あら

ためて「赤とんぼ」にも言及するかたちで「岡本かの子初期童話の構想」を改稿する。

それでは以下に「赤とんぼ」、また同様に全集未収録の童話「秀子の人形」の全文を第一次資料として紹介しておきたい。全集には「テスの話」も未収録であるが、掲載誌『童話』には復刻版(岩崎書店)も存するためここでは割愛した。なお旧漢字は新字体に改め、原文は総ルビであったが一部のほかは省略した。また誤記等には「ママ」を付した(以下同)。

赤とんぼ

秀子は、お友達とにぎやかに遊ぶよりも、独りで裏の野に出て、思ひ浮ぶまにまに唱歌をうたふのが好きな少女(をとめ)でありました。その響きとほるよい声を母家で、お裁縫なさるお母様がきかれたなら、きつとほ、ゑんで下さるだらうと思ひつくと、嬉しくなつて、つひ、涙ぐんでくるやうな、やさしい少女でありました。そして唱歌をうたはぬ時は、道ばたに咲きつゝいてある美しい草花を摘みとつて、一つ一つ口づけてやつたり、または空に高く轉つてゐる小鳥たちにもとれては、思はず呼びかけたりするのでございました。

ある秋の日の午後三時頃でせう、高く澄みわたつた空にか、つたお日様が、広い野いちめんに黄ばんだ光を投げておりました。